

学会のIT化について

文芸学部 教授 北 爪 佐知子

コンピュータの発達とその普及はめざましく、教育の分野だけでなく、学会でも研究活動でもIT化は止まることを知らない状況である。このことは日本だけに限ったことではない。というより、インターネットとe-mailの発達により一番恩恵を受け、また、毎年劇的な変化を遂げているのは国際学会活動ではないだろうか？

まず、これまで毎年同じ時期になると届いていた国際学会の通知、論文発表の応募書類、登録のための書類、分厚いプログラムは届かなくなった。すべてホームページに掲載され、会員でなくても、どの国にいても、同じ資料が同じ時間に手に入れられるようになった。「今年の国際学会情報がホームページに掲載されました」とのメールが入ると、もうそのままアドレスをクリックするだけになっていて、いとも簡単に開催地の情報が手にはいるようになっていく。カラフルな写真で大学の設備や施設が紹介され、アクセス方法もすべて記載され、バスや電車の予約まで自宅にいながら行うことができる。懐かしい友人たちの写真も楽しそうで、すぐにでも行きたい気持ちにさせられる。

国際学会登録もすべてホームページの括弧をクリックし送信するだけで完了する。航空便を出すため郵便局に行くこともなければ、登録費を送金するため郵便為替を購入する必要もない。手間も時間も昔とは雲泥の差である。この便利さを作り出した頭脳にただただ感服するのみである。ただし、これまでかかってきた郵送費、印刷費などがかからなくなった割には学会費が安くならないのは何故かという素朴な疑問は残ったままではあるが。

論文発表の応募も、これまでは、郵送期間にかかる一週間を計算して、締め切りよりかなり早く送付する必要があったが、e-mailによる応募が一般的になり、瞬時に送ることができ、海外へ郵送するための手間も時間も郵送費もかからなくなった。また、その返事も2週間以上先になるというようなことは全くなり、すぐに返答が帰ってくるようになった。国際通信は国内通信と変わらなくなり、世界が急に近くなり、海外の友人と連絡するのは、すぐ近くにいる友人と連絡を取ると全く変わらなくなった。しかも、国際電話をかける時には、必ずしなければならなかった時差を計算するという必要性もなくなった。インターネットとe-mailはまさに世界を変えたというのが実感である。

毎年講演、発表などのため国際学会に参加しているが、ここでも、大きな変化が起こっている。まず、発表のためのハンドアウトを持参する学者が減り、ノートパソコンを大型モニターやプロジェクターに接続し、パワーポイントを使った印象的な書類、動画が提示され、エクセルによるカラフルなグラフが目を引きつける。これまでのように、ハンドアウトを見るためずっと下を見ているようなことはなくなり、いつもスピーカーの顔と画面とを見ながら、スピーカーの話と一緒に参加し、議論に参加しているような、まるで、映画かテレビを見ているような錯覚さえ覚えるほどの楽しい雰囲気である。

このように、学会や講演では、ハンドアウトが少なくなってきているが、もし、興味のある資料があれば、スピーカーの名前かe-mailアドレスさえ控えておけば十分で、重い資料

をスーツケースに詰め込んで持って帰る必要もなくなった。論文がほしければ、講演者や発表者にメールで請求することもできるし、ホームページで取り出すことも可能である。

つまり、国際学会では、発表形態だけでなく、論文の掲載方法も大きく変わりつつある。論文は電子化されており、添付書類としてメールで入手できるし、また、ホームページですぐに取り出せるようにしている学者が増えてきている。時間をかけて依頼をして入手する必要はなくなり、ホームページにアクセスし、あとはプリンターに任せるだけで、海外のどこからでも論文が入手できるのは恩恵という以外にない。そして、質問があれば、メールで質問事項を送付し、その答えを受け取るのもその日のうちということも珍しいことではない。おそらく、これから、ますますこの傾向が広まり、情報や資料、学術論文は人類すべての共有財産という意識が強くなるのではないだろうか？

日本の学会でも、紀要の出版方法に変化が起き、電子化した紀要が出版されることが一般的になれば、印刷にかかる手間や費用も必要がなくなり、必要なのは、大容量のデータを送り、保存しておけるコンピュータだけという時代がくるのもそれほど遠いことではないように思える。

これからは、図書館に保存するデータもAVとCDとDVDというメディアだけということになり、貸し出しは末端のコンピュータでの送付となり、書籍は貴重な宝物となるかもしれない。実際、英語学や英文学を研究する学者にとって最も重要な辞書であるOED (Oxford English Dictionary) は出版停止となり、CD-ROM版だけとなるということを聞くにつけ、時代の大きな変化が起こってきており、さらに、それが急速なスピードで進むであろうと予感させられる。

国際学会でのこのような新たな動きと変化を見るに付け、日本の学会や大学でもこのような変革がいずれ近いうちに全国的に起こるであろうと予測できる。近畿大学文芸学部で

も教室の視聴覚化が議論になり、毎年少しずつ新しい設備を整え充実させようという計画が着々と進みつつあるが、早く充実した設備が全教室に設置されればと強く望んでいる。

我々教員の方の授業の形態も大きく変えなければならないであろう。授業で視聴覚資料を活用するため、準備にもっと時間をかける必要がある。新しい教授法を学び、学生が授業をもっと楽しいものと感じてくれるような授業へと変えるのも我々教員がどうしてもしなければならない仕事であろう。

図書館の視聴覚資料の貸し出しなどももっと自由に行えるようにしなければならないだろう。AV、CD、DVD等も、取り扱い方法をしっかり注意した上で、学生もどんどん利用できるようにし、学生の好奇心をもっとかき立て、学びたい、知りたいという意欲が高まるようにしなければならない。

施設や資料が国際水準に匹敵する程度に充実し、国際学会でも開催できるようになれば、近畿大学の国際化も一段と進み、大学の活性化が図れるであろう。海外からの留学生がキャンパスのあちこちに見られ、また、近畿大学の学生ももっと自由に留学し、国際交流を活発化していくことは、このコンピュータにより拍車のかかった国際化の波に乗って大学が大きく発展していく一つの道であろうと考える。

紀要の電子化についても考える必要があると思う。著作権の問題は解決しなければならないが、紀要を電子化し、インターネットからアクセスできるような体制を整えることで、知識の交流が容易になり、また、印刷費、郵送費なども節約できるのではないだろうか？

近年、近畿大学中央図書館でも電子化が進み、KISS (Kinki University Information Service System) により、所蔵している図書がどこからでも検索できるようになった。また、電子ジャーナルが実用化され導入されるようになり、便利になったことは大変喜ばしいことである。いつも利用している電子ジャーナルの利用法を記載しておくので、是非試してみしてほしい。

まず、近畿大学中央図書館(<http://www.clib.kindai.ac.jp/>)のホームページから、「電子ジャーナル」をクリックし、“ScienceDirect”をクリックする。次に“Journals”を選択する。SCIENCE DIRECTのジャーナルは以下の分野に分類されているので、どの専門分野も網羅されていると思う。

Agricultural and Biological Sciences
Arts and Humanities
Biochemistry, Genetics, and Molecular Biology
Business, Management and Accounting
Chemical Engineering
Chemistry
Civil Engineering
Computer Science
Decision Sciences
Earth and Planetary Sciences
Economics, Econometrics and Finance
Energy and Power
Engineering and Technology
Environmental Science
Immunology and Microbiology
Materials Science
Mathematics
Medicine
Neuroscience
Pharmacology, Toxicology and Pharmaceutics
Physics and Astronomy
Psychology
Social Science

次に、“Sort by”の欄で“Subject”を選択する。ここからは、それぞれの専門により試してほしい。

私自身の専門は言語学であるので、言語学のジャーナルのアクセスの仕方を次に述べておこう。“Social Science”をクリックすると、次の項目がリストアップされる。

Social Science
Education

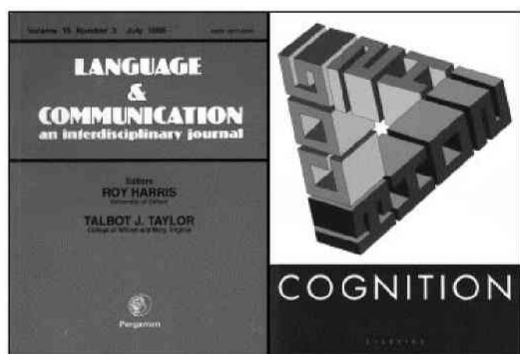
Geography, Planning and Development
Health
Human Factors/Ergonomics
Law
Library and Information Sciences
Linguistics and Language
Sociology and Political Science
Transportation

この中から、“Linguistics and Language”をクリックすると言語学の電子ジャーナルがリストアップされる。

Linguistics and Language
Assessing Writing
Brain and Language
Cognition
Cognitive Science
Computer Speech & Language
Computers and Composition
The ESP Journal
English for Specific Purposes
Journal of Communication Disorders
Journal of English for Academic Purposes
Journal of Fluency Disorders
Journal of Memory and Language
Journal of Neurolinguistics
Journal of Phonetics
Journal of Pragmatics
Journal of Second Language Writing
Journal of Visual Languages & Computing
Language & Communication
Language Sciences
Lingua
Linguistics and Education
Poetics
Speech Communication
System
Trends in Cognitive Sciences

この中からジャーナルを選択し、クリックするとバックナンバーのリストが表示され、ア

ブストラクト、テキストなどを見ることが
できる。例えば、次のようなジャーナルはよく
利用しているものである。



近畿大学中央図書館では、このような大変便利
なシステムを導入して、容易に資料を入手
できるように図っている。一つ問題があると
すれば、それは、検索に興味をとられ、あまり
楽しくなって、本来の研究に戻れなくなる
ことであろう。